

# 近世期における「正成の妻」像の変容

東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 李 忠濤

『太平記』に登場する正成は、智仁勇の三徳を兼備した武将で、天皇のために命を捧げた英雄として広く知られているが、近世期以降はその教訓的な側面が正成伝説の普及を支える肝要な要素となっていく。

『太平記』において正行の母は、父正成の戦死を悲しみ自ら命を絶とうとする正行を諫め、正成の遺訓の意味を再度教え諭す。このエピソードが端緒となり、その後正成の妻は良妻賢母として顕彰されていくことになる。

一方、近世前期に流行した「太平記読み」のテキストであった『理尽鈔』は、兵学中心の合戦談という性格から、正成の妻が正行に父の遺訓を教え諭す場面を省略し、その代わりに正成の首をめぐって足利直義と楠家の家臣間で繰り広げられた駆け引きに関するエピソードを挿入している。これは、合戦談の中では女性の存在が副次的にしか認識されないことから、『太平記』における正成の妻の情緒性豊かな描写が省略された結果と見られる。

このような『理尽鈔』における扱いとは別に、正成の妻は近世の早い時期から啓蒙目的の女訓書に登場している。仮名草子女訓書『本朝女鑑』では、『太平記』原典の正成の妻に関するエピソードが簡略な形で引かれており教訓を主眼とする女訓書の性質に即して、母として息子の誤りを戒める内容が中心になっている。

さらに、時代浄瑠璃においてはそれ以前とはやや異なる正成の妻のイメージが形成される。近松門左衛門の『吉野都女楠』において、正成の妻「菊水」は従来と同様に夫の遺志を継ぎ、息子を訓戒する良妻賢母として登場するが、その上に大力という性質をも兼ね備えた逞しい女性として描かれる。ここでは、男性のために自己を犠牲にする時代浄瑠璃の典型的な女性とは異なる、戦乱という苦難を生き抜く強い女性像が正成の妻に付与されていると言える。

一方、西沢一風・田中千柳の『南北軍問答』においては新しい趣向が設定され、正成の妻は女色に溺れる正行を訓戒する。正行の誤った行動を戒めるという点では、『太平記』と軌を一にするものの、正行が好色者として描かれる点に加えて、「泣男」杉本佐兵衛が正成の妻に代わって訓戒の内容を伝えるという点が新しい構想となっている。

このように、正成の妻は『太平記』から時代浄瑠璃に至るまで、良妻賢母としてのイメージを保ちながらも、その上に新たな趣向を取り入れつつ受容されていくことになる。

キーワード：楠正成 正成の妻 太平記 良妻賢母 時代浄瑠璃

- 一. はじめに
- 二. 『太平記』における「正成の妻」像の原形
- 三. 『理尽鈔』における「正成の妻」の位相
- 四. 仮名草子女訓書における「正成の妻」——『本朝女鑑』
- 五. 時代浄瑠璃における「正成の妻」像——『吉野都女楠』と『南  
北軍問答』
- 六. おわりに

## 一. はじめに

正成伝説は近世期に入って『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』）などの「太平記評判」を通して広く伝授されていたが、とくに忠臣・知略家・為政者として称賛された楠正成は近世の早い時期から武士を教諭する題材として利用されていた<sup>(1)</sup>。近世初期の儒者で兵学者でもあった山鹿素行も『理尽鈔』を為政者の心構えを学ぶテキストとして重視し、特にその中でも正成の事跡を見習うべきモデルとしてとりあげた<sup>(2)</sup>。多い時に門下が三千人を数えたということから、その波及力がいかに大きかったかが推測される<sup>(3)</sup>。このような正成伝説の学問的利用に便乗して、『恩地左近太郎聞書』・『楠正成一卷書』・『楠桜井書』・『楠法令卷』・『楠家伝七卷書』など、正成の教えを記録したとする兵書が続々と作成され流布していた<sup>(4)</sup>。

このような正成伝説の利用は楠正成にとどまらず、嫡子の正行は孝子の模範として<sup>(5)</sup>、正成の妻は賢母として顕彰されることになる。特に、正成の妻は忠臣正成・孝子正行とともに家内における女性の理想という重要な役割を果たしていた。日本人が見習うべき理想の一族物語としての正成伝説の形成にあたっては、子供を訓育し、夫不在の家庭をまとめ

る良妻賢母の存在は必要不可欠な要素であった。

ところが、正成の妻が果たした役割の重要性にもかかわらず、近來に至るまで正成伝説の中での「正成の妻」の意味付けについて論じられる機会はほとんど無く、正行の孝子談に付随して論じられる程度であった。「正成の妻」は女性個人を家族という枠組みのなかに押し込み、天皇への忠誠という大命題に帰納していくことだけに利用され、「正成の妻」そのものに光を当てることはなかった。戦前には大楠公夫人として熱烈に顕彰されていた「正成の妻」も、現在はその存在すらほとんど知られていない。

一方、文芸ジャンルにおいては、正成伝説は一族をはじめとする人間関係が複雑化することによってストーリーも拡大し、近世の諸ジャンルにわたって、楠一族の活躍が各々のジャンルの特徴と呼応しながら、より豊富なバリエーションを持った物語として成長・展開して行くことになるが、「正成の妻」の場合は良妻賢母のイメージに限定されず、より個性の強いキャラクターへ変貌して行く。例えば、時代浄瑠璃では戦乱の時代を生き抜く強靱な女性として描かれ、義理と人情を重んずる浄瑠璃独特の人間造形の特徴を活かしていくことになる。また、歌舞伎においては楠正成の妻「菊水」を主人公にした「女楠物」と呼ばれる一連の作品が上演されてきた。そして、明治期になると九代目市川團十郎の新歌舞伎十八番の一つとして、「賢母教訓」という角書を付けた形で「賢母教訓女楠」という演目として、正成の妻を主人公とした「女楠物」が上演されている<sup>(6)</sup>。

本稿では、このような研究状況を考慮した上で、正成伝説の展開において楠正成の妻のイメージが良妻賢母という性質を保ちながら、近代以降の天皇制教育にまで到っている一方、演芸ジャンルにおいては、多様なイメージを創りだすようになっていく過程の一端を考察する。

## 二. 『太平記』における「正成の妻」像の原形

まず、楠正成の妻が最初に登場する『太平記』において、「正成の妻」像の原形を検討してみよう。『太平記』巻十六「正成、首送二故郷一」事<sup>1</sup>では、正成の死後に足利尊氏が六条川原に晒された正成の首を正成の妻子のもとに送る。

楠ガ後室・子息正行是ヲ見テ、判官今度兵庫ヘ立シ時、様々申置シ事共多カル上、今度ノ合戦ニ必ズ討死スベシトテ、正行ヲ留置シカバ、出シテ限ノ別也トゾ兼テヨリ思ヒ儲タル事ナレドモ、貌ヲミレバ其ナガラ目塞リ色変ジテ、替ハテタル首ヲミルニ、悲心胸ニ満テ、歎ノ泪セキ敢ズ。今年十一才ニ成ケル帯刀、父ガ頭ノ生タリシ時ニモ似又同様、母ガ歎ノセン方モナゲナル様ヲ見テ、流ル、泪ヲ袖ニ押ヘテ持込堂ノ方ヘ行ケルヲ、母怪シク思テ則妻戸ノ方ヨリ行テ見レバ、父ガ兵庫ヘ向フトキ形見ニ留メシ菊水ノ刀ヲ、右ノ手ニ拔持テ、袴ノ腰ヲ押サゲテ、自害ヲセントゾシ居タリケル。(2) (引用中の句読点と濁点は筆者が適宜補った。以下同。)

父正成の変わり果てた姿を見た正行は悲しみが胸にこみ上げ、正成が兵庫へ向かう際に形見として渡した菊水<sup>(8)</sup>の刀を持ち、持込堂に向かい自害しようとする。しかし、息子の行動に異変を察知した正成の妻は、正行を引き止め、その性急な行動の誤りを教え諭す。

母急走寄テ、正行ガ小腕ニ取付テ、泪ヲ流シテ申ケルハ、「梅檀ハ二葉ヨリ芳」トイヘリ。汝ヲサナク共父ガ子ナラバ、是程ノ理ニ迷フベシヤ。小心ニモ能々事ノ様ヲ思フテミヨカシ。故判官ガ兵庫ヘ向ヒシ時、汝ヲ桜井ノ宿ヨリ返シ留メシ事ハ、全ク迹ヲ訪ラハレン為ニ非ズ、腹ヲ切レトテ残シ置シニモ非ズ。我縦ヒ運命

尽テ戦場ニ命ヲ失フ共、君何クニモ御座有ト承ラバ、死残リタラン一族若党共ヲモ扶持シ置キ、今一度軍ヲ起シ、御敵ヲ滅シテ、君ヲ御代ニモ立進ラセヨト云置シ処ナリ。其遺言具ニ聞テ、我ニモ語シ者ガ、何ノ程ニ忘レケルゾヤ。角テハ父ガ名ヲ失ヒハテ、君ノ御用ニ合進ラセン事有ベシ共不覚。」ト泣々勇メ留テ、抜タル刀ヲ奪トレバ、正行腹ヲ不切得、礼盤ノ上ヨリ泣倒レ、母ト共ニゾ歎ケル。(9)

正成の妻は、正行の行動を武士の子として相応しくないものとしてとがめ、父正成が正行を桜井の宿から返したのは、単に楠家の存続を目的としたのではなく、父に続いて一族の若党を結束し、朝敵を滅ぼして君の世を取り戻すためであることを、「其遺言具ニ聞テ、我ニモ語シ者ガ、何ノ程ニ忘レケルゾヤ。」と、自ら聞き覚えてはいるはずのところを、いつの間にか忘れたのかと叱責する。

この場面は父の死を哀しむ孝子としての正行と、夫の死という現実の中で、正成の遺訓を息子に訓戒する良妻賢母としての正成の妻の姿を表しており、楠一族を忠孝のモデルとして創り上げる決定的な端緒を提供している。これによって、忠臣正成、孝子正行とともに、良妻賢母としての正成の妻が描かれ、天皇に対する忠を明らかに示した理想的な一族のモデルとしての楠一族が誕生することになる。

## 三. 『理尽鈔』における「正成の妻」の位相

近世期に入ると、正成伝説は『太平記』本文とともに『理尽鈔』などの太平記評判を通して広く受容されることになる。『理尽鈔』は、『太平記』の合戦や事件あるいは人物などについて政治と兵法の側面から論じた書物で、兵学者や大名たちにとっては為政者の心構えを学ぶためのテクストとして重要視された。また一方では「太平記読み」と呼ばれる講釈師

たちの種本として用いられたことから、大衆のレベルでも広く受容されたと言われている<sup>(10)</sup>。『理尽鈔』の内容は『太平記』に描かれた事件・合戦・人物などについて、「評云」という形で論評を加え、また「伝云」という形で異伝をかかげることによって『太平記』の世界を拡充している。『太平記』巻十六「正成首送二故郷一事」に該当する『理尽鈔』の記事も大筋は『太平記』の内容と同様であるが、その記事の中にはいくつか注目すべき点がある。

『理尽鈔』でも足利尊氏は『太平記』と同様に正成への哀惜の念を語り、楠家への融和の意志を伝えるために正成の首を送るが、「伝」の記事ではそれは実は尊氏の舍弟である直義の計略であったとしている。

○伝云、直義宣<sup>ノタマヒ</sup>ケルハ正成カ首故郷へ送給バ、諸人ノ見聞ノ前ハ情<sup>ナサケ</sup>アリ。又謀共ナリヌベク候。正成イツゾヤ、直義ニ語シハ敵余多討捕タルニ敵強シテ不破、訪軍ヲト心ニ懸ナハ、名アル首共ヲ敵国ニ送、傍<sup>アタリ</sup>近者訪<sup>ノソム</sup>為首共所望ヲ被<sup>レ</sup>遣候ヘバ、一ハ情アリ、又ハ其空<sup>ソノムナシ</sup>キ顔<sup>カウ(マモ)</sup>ヲ見テハ、如何ナル勇士モ気弱<sup>キヨハキ</sup>成テ、軍ヲセズ又恐<sup>ヨソル、コ、ロ</sup>意アル也。又其コ、ロザシヲカンジテ味方属<sup>ミカタシヨクス</sup>ル者<sup>モノ</sup>二候ゾ。又打テ出<sup>イデシ</sup>ト欲<sup>ヨモフ</sup>モ、此アハレニ被<sup>レ</sup>引テ十月二十日ノ内ニハ打出ス候ト申タリ。実<sup>ゲニ</sup>モトヲボヘ候。郎徒ノ首共ヲハ、湊川ニ被<sup>レ</sup>捨候ヘバ力ナシ。<sup>(ア)</sup>正成ガ首ヲバ故郷へ送ラレバ、後室ハ女性也多聞丸ハ幼ケレバ、歎<sup>ナゲキ</sup>入候<sup>ソノワラヒ</sup>ナント被<sup>レ</sup>申シ。<sup>(イ)</sup>

『太平記』では足利尊氏の哀悼の情から正成の首を正成の妻子のもとに送ったとされるが、ここでは敵を惑わすための直義の陰謀として説明される。直義の意図は、正成の首を河内の楠一族に送る事によって表面的には衆人に尊氏の慈悲深さを印象づけつつ、戦略的には、亡くなった主君正成の首を楠家の郎徒に見せつけることで、その士気を削ぐことに

あった。つまり、「伝」はこの場面を戦中の一種の心理戦として解釈しており、兵法のテクストとしての『理尽鈔』の特徴が表れた場面とも言える<sup>(12)</sup>。

ところが、楠家の家臣たちはこの直義の計略を看破していた。楠家の郎徒たちが尊氏の慈悲深さに感動していると聞いた楠の老中は、「敵ノコ、ロザシヲ奪<sup>ウバハン</sup>ガ為<sup>タメ</sup>。正成ノ宣ヒシ事はナリ。」<sup>(13)</sup>と言い、正成の首を受け取ると請文を書いて使者を帰し、和田をはじめとした宗徒の者や家子・郎徒を集めて、「判官殿常ニ宣ヒシ事ゾカシ。敵ノコ、ロザシヲウバハンガ為<sup>タメ</sup>ニ首ヲ送事」<sup>(14)</sup>と、これは正成が生前にすでに注意していたことだと告げて、尊氏側の計略を皆に教え諭す<sup>(15)</sup>。そして、尊氏軍の河内への侵攻に油断なく備えるべきであると訴えると、楠家の家子・郎徒は正成の首を前にして皆涙にむせびながら、

中々力<sup>チカラ</sup>ヲ落シタル体モナク、帯刀殿覺テ御在スル上ハ判官殿ニ相同シ、ナガラヘテ無<sup>キ</sup>甲斐<sup>カヒ</sup>ニ命ナレバ、アハレ尊氏ガ寄来レカシ、一戦ヲコ、ロヨクセント勇ミアヘリ訪<sup>イサ</sup>尋常ナリ。世上乱タル最中ナレバナリ。最賢<sup>イトカシヨク</sup>ニヤ。<sup>(イ)</sup>母、正行ガナゲキ、如<sup>レ</sup>抄。<sup>(16)</sup>

と、足利軍が寄せて来ても正行とともに戦うことを誓う。このように、『理尽鈔』では『太平記』には記述されていない楠家の家臣たちの対応を中心に取り上げる反面、夫と父親の死を目の前にして悲しみに耐えながら、天皇への忠誠を改めて誓う正成の妻や正行の様子を描いた感動的な場面は省略されている。『理尽鈔』が取り上げるのは、正行への遺訓だけではなく、生前において正成の普段の言動を学習していた家臣たちの姿である。

それでは、『理尽鈔』はどのような理由で『太平記』とは異なるストーリーを創り上げたのだろうか。ここで、傍線部(ア)で示した正成の妻

と正行に対する直義の評価にも注目してみたい。直義は正成の妻や正行について、女性と幼児であることから、首を見せればただ嘆くばかりであろうと侮っている。そして、『太平記』において正行は父の死を悲しむ孝子として、正成の妻は正成の遺訓を息子に教訓する賢母として形象化されていたが、ここでは、傍線部（イ）のように、ただ悲嘆に暮れる姿が描かれるだけで、孝子と賢母としての記述も見当たらないのである。

このように、『理尽鈔』において正成の妻の良妻賢母ぶりが省略されたことは、『理尽鈔』の女性観に起因していると思われる。『理尽鈔』巻十六の「正成桜井ニテ正行ニ遺言ノ事」では、北朝方の足利尊氏との戦いを前にした正成は、湊川に向う途中、これが最期の戦いとなることを予感し、息子正行を桜井駅に呼んで庭訓を遺し、父の死後にも力強く成長して天皇への忠義を守ることこそ親への孝行であると訓戒しているが、この中では、「汝カ長生ナランマテハ、諸事和田殿恩地殿矢尾殿ヲ以テ父ト思ヒ、毎事母ニ談ル事ナカレ。女性ハ愚ナル物ゾカシ。」<sup>(17)</sup>と、母の忠告を盲信しないよう遺訓している。このように、『理尽鈔』における正成は女性を愚かな存在とし、むしろ母に相談することを控えるよう告げているが、これは『太平記』本文にも見られない内容であり、同じく太平記評判の一種である『太平記評判私要理尽無極鈔』にも、また徳川光圀が『大日本史』の編集を行うにあたって修史の助けとするために今井弘済に命じ完成させた『参考太平記』にも記されていないもので、『理尽鈔』における正行の母の位置を垣間見ることが出来る箇所であると言える。ここでは正成が正行に母ではなく和田、矢尾、恩地などの部下たちにすべてのことを相談するべきと遺訓していることから、正成と部下たちの信頼関係の堅さが強調されていることを読み取ることが出来る。

『理尽鈔』では、『太平記』で正成の妻が行っていた訓戒も正成が代わりに行っている。

正行申ケルハ父ニ離參セテ河内エハカヘルマジ。是非共軍ノ御供仕候ト申ケレバ、正成大ニ諫テ云、良汝ヲ留メ置事ハ不便也ト計ニハ非ズ。君ノ御為ナルゾ。此程事聞入スンバ最愚也。君ノ御用ニモ難立後ニハ降參不義ノ心ヲヤ可レ持ナント、或ハイカリ、或ハ和シテ申ケレバ、正行幼心ニモ是ヲ聞入ケルガ、去バ仰ニ随ントゾ申ケリ。父大ニ喜ビ祖父正晴ヨリ持来タル也。我今マデ身ヲハナサデ持シゾ我ヲコイ敷ト思ハン時ハ、是見給ヘトテ遣シヌ。<sup>(18)</sup>

傍線部のように、ここでは正成が河内に帰ろうとしない正行に対して直接彼を諫めて河内に帰す意義について説明している。実はこれは『太平記』では正成の死後、正成の首が送られて来た時に、菊水の刀で自害しようとする正行に対して正成の妻が父の遺訓として話した内容と同一である。つまり、『太平記』には存在しないこの場面を設定することによって、『太平記』において正行に父の遺訓を教え諭す良妻賢母としての正成の妻を設定することは不要になる。そして、『太平記』では正行が父の形見の菊水の刀で自害を試みるが、この場面では、代わりに正成が祖父の正晴より受け継いだ刀を渡している。

このように正成の妻の存在感が薄くなったのは、先述したように『理尽鈔』の女性軽視の態度に起因していると見られ、このような傾向は『理尽鈔』全体を通して貫いている。『太平記』巻一「頼員回忠事」には左近藏人頼員の妻が登場するが、後醍醐天皇より謀叛への協力を頼まれた頼員が妻にそのことを洩らしたところ、妻は父斎藤利行にこの事実を告げ、利行に説得された頼員は結果的に翻意する。『太平記』では頼員の妻に対して、

彼女生心ノ賢キ者也ケレバ、夙ニヤキテ、ツクドト此事ヲ思フ

二、君ノ御謀叛事ナラズバ、憑タル男忽ニ誅セラルベシ。若シ又武家亡<sup>ホロビ</sup>ナバ、我親類誰カハ一人モ残ルベキ。サラバ是ヲ父利行<sup>トシユキ</sup>ニ語<sup>カタツ</sup>テ、左近藏人ヲ回<sup>サコシクラウド</sup>忠<sup>カヘリチユウ</sup>ノ者ニ成シ、是ヲモ助ケ、親類ヲモ扶<sup>タス</sup>ケバヤト思<sup>オモウ</sup>テ、急ギ父ガ許<sup>モト</sup>ニ行<sup>ユキ</sup>、忍<sup>シノビ</sup>ヤカニ此事ヲ有<sup>アリ</sup>ノ俣<sup>マ</sup>ニ語<sup>カタツ</sup>リケル。(19)

と、頼員を寝返らせた行為が夫と親類、両方の立場の間で板挟みとなった結果の哀れな選択であったことを記している。ところが、同じ箇所『理尽鈔』の「評」は、頼員の妻の行動について、「又女。父ニ語リシハ最賢<sup>イカシコ</sup>シ。父ノ為ニハ孝有<sup>カク</sup>テ。為<sup>ユ</sup>レ男<sup>ヲノコ</sup>ニ忠有<sup>チウ</sup>リシ也。」<sup>(20)</sup>と、忠孝に適っているとして一定の評価をしているものの、妻に後醍醐天皇の謀叛のことを語った頼員の言動に対しては厳しい批判が向けられる。

○評云、往古ノ人ハ女ニ不<sup>ス</sup>レ<sup>タ</sup>レ<sup>レ</sup>トコソ聞<sup>キコ</sup>ヘシ。況<sup>イハシ</sup>ヤ大事ヲ前<sup>マエニテ</sup>当<sup>タ</sup>ナガラ、何<sup>ナニ</sup>ゾ女ニ戯<sup>タハシ</sup>レ<sup>レ</sup>シヤ。是一<sup>コト</sup>ツ。大事ヲ女ニ語<sup>カタ</sup>ル是二<sup>ニ</sup>ツ。女ハ六波羅奉行ノ息女ナレバ敵<sup>カタキ</sup>也。<sup>(21)</sup>

と、その批判は大事を前にして妻と戯れ、信用すべきではない女性という存在に謀叛を語ってしまったことに向けられる。そこで、「○評云、男子ノ俣<sup>タメニ</sup>スラ為<sup>タメニ</sup>政道<sup>ノ</sup>寇<sup>アタ</sup>ナリ。況<sup>イハシ</sup>ヤ女ヲヤ、是傾国ノ端也ト云云。」<sup>(22)</sup>と、大事を企図する男性は常に女色を警戒するべきであると、武士の行動指針という次元から頼員の言動を評している。

この他にも、『理尽鈔』には『太平記』における女性に対して賞賛する内容を省略<sup>(23)</sup>、または簡略化したり<sup>(24)</sup>、場合によっては非難したりするなど<sup>(25)</sup>、全体的に女性に対しては批判的なスタンスを取っており、このような女性軽視の傾向は楠正成の妻に対しても例外ではなかった。そして、これは武士相手の講釈のテクストであった『理尽鈔』の性

格にも起因するものである。兵法のテクストであった『理尽鈔』は男性向けの合戦談として編集されており、そもそも女性なるものの存在が合戦談の中では付随的かつ周縁的にしか見られていない従属的なものであることから、『太平記』における正成の妻の情緒性豊かな描写は省略されるようになったと思われる。

#### 四、仮名草子女訓書における「正成の妻」——『本朝女鑑』

『理尽鈔』では正成の妻が正行に父の遺訓を教え諭すというエピソードが省略され、代わりに足利直義と楠家の家臣間の戦中の駆け引きに改変されていたが、一方正成の妻の良妻賢母像を前面に打ち出して強調している作品も近世の早い時期から既に刊行されていた。それが仮名草子の女訓書である『本朝女鑑』(十二巻、浅井了意作<sup>(26)</sup>、寛文元(一六六一)年)である。『本朝女鑑』は中国の女訓書に倣って日本の賢婦・節婦の説話を集めて教訓化したものである。

仮名草子は江戸時代初期に現れた啓蒙・教訓的読み物で、民衆教化のための幕府による儒教の推奨と相まって広がっていった。仮名草子の女訓物はその中でも女性を対象とした儒教的教訓書で、近世初期には「女訓書」と総称される仮名草子類が夥しく出回っている<sup>(27)</sup>。このような女訓書は最初は中国の説話に拠ったものが大半であったが、次第に日本の古典に例を求めたものが出現する。それが『女郎花物語』・『本朝女鑑』・『和漢／賢女物語』などである。

特に、『本朝女鑑』は教訓を主としながらも歴史物語に登場する女性をモデルにして、原話により物語性を加味して、読み手に感動を与えるものとして加工している<sup>(28)</sup>。それは女子のための教訓書であるとしても、仮名草子という読み物としての面白さを追求する必要がある、このような物語性を取り入れた楽しさ・面白さを追求することは教訓としての仮名草子に欠かせないものであった<sup>(29)</sup>。

『本朝女鑑』の特徴は単純に既存の説話を継承したのではなく、原典には姿を見せない新たな人物の登場や主人公の設定、原典の内容の改変など、作者の作意が反映された創作が施されていたことにある<sup>(30)</sup>。また、もう一つの特徴は軍記物語に登場する女性たちが多数取り上げられていることにあり、『太平記』からも正成の妻「楠帯刀母」を含め十数名の女性が登場している<sup>(31)</sup>。

『本朝女鑑』における「楠帯刀母」の内容は『太平記』とほぼ同様で、『太平記』巻十六「正成首送故郷事」をそのまま要約した形になっており<sup>(32)</sup>、新しいストーリーの改変はほぼ行われていない。やや長いが次に全文を挙げる。

楠 正成が妻は、帯刀正行が母なり。正成は兵庫の湊川にしてうたれぬ。このたびをいくさのさいごと思ひければ、子息たてはき十一歳になりけるを、桜井の宿よりこきやうにかへしけり。はたして正成うち死しければ、尊氏その首をこきやうにをくりつかはされたり。妻子郎従これを見て、判官の兵庫におもむきし時、さまざま申をきける事ども、今度の合戦にうち死すべしと思ひ、さだめしゆへなれば、かねて思ひまうけし事なれども、かたちをみれば、目ふさがり色変じて、替りはてたる首をみるに、胸もだえ心くらみて涙の色もかはる斗也。帯刀今年十一歳ち、が首の生たりし時にも似ず、かわれるありさま、は、が歎きのせんかたなげなるを、流る、なみだをそでにをさへて、持仏堂の方へ行けるを、母あやしみて行てみれば、ち、がかたみにとゞめをきし、きくすいのかたなをぬぎもち、はかまのこしををしさげて、自害をせんとす。母はしりよりて、正行にとりつき、涙とともに申けるは、梅檀ハ二葉より芳ばしく、類伽の鳥は卵より諸鳥にすぐる、といへり。なんぢおさなくともち、が子ならば、これほどにはまよふべしや。こ心に

もよく／＼事のやうをおもふてみよかし。ごはんぐはんどのひやうごへむかはれし時に、なんぢをさくらあよりかへしとゞめられたる事は、あとをとぶらはれんためにもあらず、はらをきれといふ事にもあらず、正成うんめいつきてうち死にすとも、主上いづかたにもおはしますとうけたまはらば、死のこりたらん一族らうどうどもをふちしをき、いくさをおこしてうてきをほろぼして、二たび主上を御代にもたまいらせよと、ゆいごんせしをき、て、みづからにもかたりしものが、いつのほどにわすれて侍るへぞ。さやうならばち、が名をうしなひ、君の御ようにもたつべからずといさめとゞめ、かたなをうばひとれば、まさつらは礼盤のうへよりなきたをれ、は、とともにぞなげきける。その、ちより、まさつらち、がゆいごんは、のけうくんこ、ろに染、きもにめいじ、はかなき手ずさびわらはべのたはぶれにも、てうてきをせめふせ、うちとるまねよりほかはせず。は、かい／＼しくそだてあげ、一族わかたうにもねんごろにふちし、まさつらつらにうつて出つ、ち、にかはらぬ武略をなし、名を天下にして、まさつらをうみけん、さいちけいさくのたくましき事、世もつてまれなる女性かなと、時の人は申けるとなり。<sup>(33)</sup>

これによると、原典の『太平記』とほぼ同様であることが分る。浅井了意は近世小説作者の嚆矢ともいわれる人物で、『本朝女鑑』において改変や創作を行い、極めて文芸的形象性に優れ、読み物として頗る興味深いものになったのは、彼の舌耕者としての戯作精神の発動であるといわれているが<sup>(34)</sup>、「楠帯刀母」の場合は新しいエピソードの追加や物語の拡充は行われていない。それは、『太平記』の原典そのままでも充分ストーリー性を保持しており、すでに良妻賢母の「婦徳」を強調した女訓として、一つの独立した物語として完結しているからである。これは女性に教訓を教示するという『本朝女鑑』の本来の目的に符合した形

で、「太平記読み」などを通してすでに知られていた「正行の母」に改めて改変を施すよりは物語の簡略化を通して効率的な教訓の伝達を図った結果であると思われる。

『本朝女鑑』巻六「節義下」には七編の『太平記』所拠の章が並んでいるが、これらの諸章は改変部分が少なく原典に忠実である。濱田啓介氏はこれに対して、作者がかなり面倒くさくなって、次々に『太平記』を翻しては、それらしいものを拾って当てはめてしまった結果、これらの拾い得られた女性たちが「節義」の範疇にあてはまるとは言い得ないという<sup>35)</sup>。同氏の分析通り、これはただ「節義」の項に必要なエピソードを取り揃えるために『太平記』に登場する女性たちを拾い集めたかもしれない。ところが、それにしても個々のエピソードにおける創作のレベルではなく、教訓を主眼にする女訓書という『本朝女鑑』の性質を念頭において全編を俯瞰して、その統一性を考慮してみると、『太平記』の女性たちが原典そのまま選ばれた意義は見えてくるはずである。つまり、作者の意は『本朝女鑑』において虚構の創作を通して作意を表すとともに、原典に依拠した内容を自らの文章で簡略化し、啓蒙的教訓を伝える意図をも持っていたと考えられる。

「楠帯刀母」もその中の一つであり、啓蒙・教訓を主にする中でも、作者の作意を読み取れる改変の部分があるとすれば、物語の末尾の傍線部に「は、かい／＼しくそだてあげ、一族わかたうにもねんごろにふちし、まさつらつるにうつて出つ、ち、にははらぬ武略をなし、名を天下にして、まさつらをうみけん、さいちけいさくのたくまじき事、世もつてまれなる女性かなと、時の人は申けるとなり。」<sup>36)</sup>とあるように、「楠帯刀母」がその賢母ぶりで正行の成長と活躍に多大な影響を与え、世間に評判が高かったと付記しているところである。

先述したように、正成伝説は近世初期から教訓の題材としても利用されてきたが、正成の妻も啓蒙目的の女訓書に登場している。こうして楠

正成・正行父子の忠孝の物語に、夫を扶助し息子を教諭する良妻賢母の物語が加わることになり、道徳上の理想ともいべき家のモデルが完成する。すなわち、正成・正行父子を模範にする武家家訓に、正成の妻を理想とする女訓書が一体になって、天皇への忠を支えた家族の物語へとつながっていくのである。

## 五. 時代浄瑠璃における「正成の妻」像

### ― 『吉野都女楠』と『南北軍問答』

近松門左衛門の『吉野都女楠』（宝永七（一七一〇）年）竹本座初演、以下『吉野都』と略）は『太平記』を世界とした時代浄瑠璃で、まずその題名中の「吉野都」と「女楠」という言葉から、吉野を本拠とした南朝を背景に「女楠」の活躍を中心に描いていることが容易に想像できる。ところで、この題名の「女楠」からは正成の妻が想像されるが、物語の構成は楠正成や息子の楠正行の活躍と、新田義貞と小山田高家に関わる物語との、二つの筋合が巧みに編み合わせられて、楠の妻の「菊水」が登場するのは第四段目で息子正行に訓戒する場面に限られており、作品の中でその比重はそれほど大きくはない。

それにも関わらず、近松はどのような理由で題名に「女楠」という言葉を使ったのだろうか。これには当時「女〇〇」という呼び方が演劇界に流行していたことも一つの理由であると思われる。元禄頃から歌舞伎界では女方による武道物が流行し<sup>37)</sup>、外題名に「女」の文字を冠したものがしばしば興行されている<sup>38)</sup>。土佐浄瑠璃にも「女鎌足」や「女影清」のような作品が残されているが、このような「女」を冠する浄瑠璃の特徴の一つは女性の武勇を見せ場とすることにある。天和・貞享頃の「四天王女大力手捕車」「大力女」をはじめとして、古浄瑠璃にもその系譜を探ることができる<sup>39)</sup>。近松の場合も浄瑠璃『平家女護嶋』（享保四（一七一九）年八月）に「女／牛若俊寛」という角書

のついた正本があることから<sup>(40)</sup>、「女楠」も浄瑠璃においては女性の武勇を見せ場とする浄瑠璃の系譜と、歌舞伎における女武道物との関連の上で成立したものであると思われる。

一般的に「女〇」と言えば、「〇のような女」という意味が含まれているだろう。つまり、「女楠」は「楠のような女」という意味を包含しているはずだが、それはどのような「女」なのだろうか。それを知るためには、「楠」が持つ意味を把握する必要がある。先述したように、楠正成は『太平記』において後醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼさんとの誓いを立てた忠臣として、また優れた智謀と機略を用いて活躍するヒーローとして描かれている。即ち、「女楠」は忠臣や知略家として知られている楠正成のように智略を働かせる、もしくは主のために「忠」を尽くす女性を意味するだろう。

ここで、『吉野都』における「女楠」のイメージがどのように形成されていくのかを考察する前に、『吉野都』の刊行以前に「女楠」が「楠」のような知略を働かせる女<sup>(41)</sup>の意味で使われた例を一つ挙げてみよう。江島其磧作、宝永三(一七〇六)年刊行の『風流曲三味線』の巻三の三「床の軍法女楠両大臣金の力くらべ松を引ぬく堺の兵」では、かつらぎという女郎が知謀を活かして太鼓持の腎力を弱めたというエピソードが登場するが、ここにかつらぎは「さりとは楠まさりの女郎」と評され、「女楠」は正成のように智恵を働かせる女という意味として使われていることが分る。すなわち、戦の知略と言えは楠正成という認識が広く流布していた中で、遊女の手練手管を正成の智略に喩え、好色的な場面と楠正成の智略とを結び付けた滑稽なストーリーに仕立て上げているのである。この例からみても、「女楠」という言葉は広い意味に通用されてきた可能性がある。

『吉野都』においても「女楠」という題名が、正成の妻「菊水」に限らず、『吉野都』に登場する他の女性たち、すなわち節操を守りぬく新

田義貞の妻勾当内侍や夫の忠孝を助けるために麦を盗んだ小山田太郎高家の妻などを含んだ、より広い意味での「女楠」を指している可能性はあるが、本論では、歌舞伎の「女楠物」<sup>(42)</sup>に繋がる先駆けとして、「正成の妻」という狭義の「女楠」に注目することにした。

『吉野都』では、その第四段目で、楠正成が討死から百日の忌が明け、十一才の楠正行は父の敵である足利尊氏を討つために、無断で館を抜けて天神の森に向かうことを決心する場面で「女楠」の活躍が描かれる。

あづさ(梓) 弓光陰矢のごとく楠正成が百ヶ日たつ(経・立)や、  
其名も忘れがたみ(難・形見)の 一子帯刀十一才、父がさいご(最期)  
の無念さの胸にとまりほね(骨)にしみ、をさな(幼)心に只一  
き(騎)とふら(弔)ひ軍思ひ立、(中略)かつし〜とおゆませて、  
神の昔も念力の示現は今もあら(有荒)人神天神の森にぞ着にける。  
あらふしぎ(不思議)やうしろ(後)のかた(方)に女のごゑ(声)、  
まてよ〜とよ(呼)びかけたり、何者やらんとふりかへれば、  
⑦きぬ(衣)引からげこし(腰) 刀長刀かいこみ追かくるは母上也。  
なむ(南無) 三ばう(宝)、我をとめん為也と一むち(鞭) くれ  
てかけ(駆) さする。⑧息をはかりに走り付くら(鞍)のしほ(四  
方) 手をむざと取、とめても引てもかけ(駆)、馬の二三十間引ず  
られ、やれ物がつ(憑)いたか。帯刀母にもし(知)らせず、いづ  
くへ行ぞ。正つら(行)、母は息きれし(死)ぬるをもかまはぬか。  
馬をと(止)めぬかせがれ(悴)めと、さげび給へば正つら(行)  
馬よりとんでおり、土に手をつきかうべ(頭)をさげ、父のい(忌)  
みの明候へばとふら(弔)ひ軍仕り、高氏と打はた(果)さんと思  
ひ立候。御いとま申さぬ段まつひら御めん下されとさしうつぶ(俯  
いてぞゐたりける。<sup>(42)</sup>

正行は父の敵討をするために馬に乗って天神の森に向かうが、跡を追いかけて来た正成の妻は正行が乗っている馬の手綱にすがりつき、そのまま馬を引き止める。正行を引き止めた母は腰刀や長刀を身につけ、戦乱の中を生き抜くべく戦う女性の姿で登場する。馬はそのまま走って正成の妻を二三十間引きずったが、それでも手綱を放さない。これはまさに剛毅な大力女の典型である。このような正成の妻の怪力は、物に驚き狂い走る馬の手綱を高下駄で踏み留めた「近江のお兼」を髣髴させる。この「近江のお兼」は鎌倉時代の初め、近江国海津にいたという遊女で、『古今著聞集』巻第十「近江国遊女金が大力の事」に見える<sup>(43)</sup>。このように、正成の妻を「近江のお兼」さながら大力女として形象することは、外題名に「女」を冠する浄瑠璃の特徴の一つが女性の武勇を見せ場とすることに影響をうけており、これによって、ただの良妻賢母として戦う男性を背後から支えるだけに止まらない、より積極的で剛毅な女性像が描かれることになる。

そして、正成の妻は父正成の遺訓を忘れた正行を諭す。

父ごぜ（御前）の桜井より汝をかへ（婦）し給ひし時、お（生）ひ  
さき迄の教訓を母にもかた（語）り聞せしが、百日立やた、ずにて  
其諫（いさめ）を忘れしか。一族かたらひぐん（軍）兵そろへ、菊水のはた（旗）  
まつさき（真先）にをしたて、古今ぶ（無）双の名将とよばれたる  
足利高氏に、一あみあぐ（巻）ませんとは思はずして、一騎武者の  
はたら（働）きにいか成手がら（柄）したればとて、其名をあぐる  
計にて天下の為には益もなし。をさな（幼）く共楠正成が子六十州  
をおもに（重荷）、持ッ、大じ（事）の身とは思はぬか。うら（恨）  
めしや情けなや。<sup>(44)</sup>

正行の母は正成が桜井邸で正行に残した遺訓の大義を理解し、後日の再起を謀るべきと正行を諭すのであるが、これは『太平記』巻十六「正成下<sup>ゲ</sup>向<sup>カウ</sup>兵庫<sup>ニ</sup>事」の母の教訓によっているものの、傍線部のように、正成が妻にも直接遺訓を語ったという内容は『太平記』や『理尽鈔』には見当たらない創作の部分であり、正成の妻の役割はより大きくなっている。特に、『理尽鈔』がこの場面を省略して、「毎事母<sup>ニ</sup>談<sup>ル</sup>事ナカレ<sup>ニ</sup>。女性ハ愚<sup>ハ</sup>ナル物ゾカシ<sup>。</sup>」<sup>(45)</sup>といい、母に相談することを控えるよう告げていることに比べれば、正行の母はその良妻賢母としての存在感を増している。

『吉野都』は全編の内容が後醍醐天皇をめぐる南朝方の忠臣の活躍を主にしており、従来の研究においては近松の天皇劇の一つとして論じられてきたが<sup>(46)</sup>、外題の「女楠」に着目すると、この作品は正成の妻や勾当内侍・小田山高家の妻など、一連の女性の活躍を中心に物語が展開しているとも解釈できる。小田山高家の妻は酒売りにやつした名和長年とともに、坊門清忠の下屋敷から後醍醐天皇を脱出させる。また、勾当内侍は千草頭中将と心を合わせ三種の神器を三輪の里まで運んで来て、後醍醐天皇のために働いている。

もちろん、「正成の妻」の役割も天皇劇としての物語全体の主題にも関わっている。近松は「いつの世にか天皇さまを御世に立、父亡魂<sup>ほうこん</sup>の本意をばとぐ（遂）るぞや。親の敵討んとてかろく敷身をすつ（捨）るは葉侍のうへのこと。」<sup>(47)</sup>と、正行の母のセリフを通して天皇劇としての本作品の大義を明らかにする。つまり、近松は『吉野都』を、後醍醐天皇を中心とした南朝の時代劇として創り上げており、その大義を「正成の妻」の口を借りて伝えているのである。

近松は「太平記読み」としても活躍していた節があり、近松の作品と太平記読みとの関係は深いものがあると言われてきた<sup>(48)</sup>。近松の『大経師昔暦』（正徳五（一七二五）年正月）中之巻「岡崎村の段」では赤

松梅龍が「楠湊川合戦」という演目で太平記講釈を行うという設定が見られる。

京ちかき岡崎村にぶけんしや（分限者）の下やしき（屋敷）をば両隣（ととなり）中にはさ（挟）まるしよげ鳥の牢人の巢のとりぶきやね（取葺屋根）、見るかげほそ（影細）き釣（つり）あんどう（行灯）、太平記講釈（かうしやく）赤松梅龍（あかばらうりゆう）とする（記）せしは玉がためには伯父（おぢ）ながら、奉公（ほうこう）の請（うけ）に立、他人向（たにむか）にて暮しけり。講釈（かうしやく）は（果）つれば、聞手（うきやく）の老若（らうじやく）、出家（しゅつが）まじりに立帰る。なんと聞事（もんじ）な講釈（かうしやく）五銭（ごせん）づゝにはやす（安）い物。あの梅龍（ばいりゆう）ももう七十でも有（あ）るが、一りくつ（理屈）ある顔付（かおづ）ア、よい弁舌（べんぜつ）、楠（くすのき）湊（みなと）川合戦（かわがせん）おもしろいどう（胴）中（ちゆう）、仕方（しかた）で講釈（かうしやく）やられた所本（ところほん）の和田（わだ）の新発意（しんぱつい）を見る様（さま）な、いかひ兵（へい）でござつたのいづれも明晩（めいばん）く〜とちり〜にこそ別（わか）れけれ。（49）

この「楠湊川合戦」の部分は、『太平記』の主眼であり、土佐浄瑠璃の演目にも見えるが、その内容は尊氏討伐のために摂津出兵を命ぜられて死を決した正成が討死によって四十三歳の生涯を完結する姿をテーマにしており、楠正成を智・仁・勇兼備の名将として賛美している。そして、土佐浄瑠璃の「楠湊川合戦」の最後の部分は、その原典は『太平記』巻第十六「正成首送故郷事」に当たるものの、実際にはほぼ『理尽鈔』の記事をそのまま簡略化した形になっている。『徒然草』を講じたこともある講釈師近松であつてみれば、素材を舌耕文芸より得たことも多かったであろうことから、近松は『理尽鈔』の記事の内容をすでに知っていた可能性が高い。それにも関わらず、近松は『理尽鈔』の内容とは異なり、正成の妻に正行を訓戒するという重要な役割を与えている。

時代浄瑠璃では勾当内侍や小山田高家の妻のように、男性のために自己を犠牲にする女性が多く登場するが、『吉野都』で活躍する「菊水」は

夫の遺志を継ぎ、息子を訓戒する良妻賢母であり、さらにそこに大力という性質をも兼ね備えた逞しい女性である。これは戦乱という苦難を生き抜く新たな女性像を近松が正成の妻に付与した結果であると言えよう。

ただし、この大力女という趣向がそのままその後の時代浄瑠璃における定番となった形跡はなく、正成の妻のイメージは作品によって異なる。しかし、注目されるのはその何れもがこれまで取り上げてきたような良妻賢母としての正成の妻の性質を基にしているという点である。その一例として西沢一風・田中千柳の作で享保十（一七二五）年初演の浄瑠璃『南北軍問答』を取り上げたい。『南北軍問答』の三段目は楠正成が湊川の合戦で自害した後の時代を舞台として、正成の妻実相院と息子正行を軸として展開しているが、その冒頭は、楠正成の妻である実相院が近頃遊女三吉野との女遊びに溺れている息子正行を諫めるために「泣男」杉本佐兵衛を伴って正行を訪れる場面から始まる。

勝手い口より口々にお袋様（ふくろ）よりのお使杉本佐兵衛といふ侍参られ、何やら直に申上たいとりくつばつた顔つき、御逢遊（あひ）ばすと立さはげば、何にもせよ母よりの御使、逢ぬは不礼（ふれい）恐れ有。なふ三吉野（よしの）さびしく共ちつとの間女（まんな）共相手に何なりと慰（なぐさ）み、奥（おく）へ〜。佐兵衛はへといふ顔も心もすまず見えにかり。女中の案内に杉本佐兵衛、其名かくれも泣男、やり戸口にさし窺（うかが）へは、近ふ〜と呼出す。はつと計にさしうつぶき先、涙にぞくれにける。（50）

この「お袋様」とは正行の母、正成の妻である実相院で、「泣男」杉本佐兵衛はまず一人で三吉野の膝を枕に夢うつつの正行のところへ使者として参上し、正行に会い涙ぐみつつ、近頃正行が公綱より送られた遊女三吉野との遊びに熱中し、参内も滞っているのは情けないことだと母の口上を伝える。ここで実相院が送り込んだ「泣男」杉本佐兵衛とは、『太

平記』には登場しないが、「泣芸」に優れていることを理由に楠正成に取り立てられた男として『理尽鈔』に登場する人物である。杉本佐兵衛が申し上げた実相院の口上には、

うたてや情なや武士には一つの嗜<sup>たしまみ</sup>有。なんぼう弓矢にかしこく忠義の心深ふても、色に迷ふは玉に疵<sup>きず</sup>、たとへ弓矢にかしこく共、父正成殿に似てもつかふか。君を大切<sup>せつ</sup>、天下太平と思ふ共、父の忠義にまさらふか。(中略) 勅命<sup>ちよくめい</sup>を請て其日より湊<sup>みなと</sup>川の今は迄、終に女とあいむしろふみ給はず、鎧<sup>よろひ</sup>の上帯とかぬほど心をつくし氣をくだき、御身を堅<sup>かた</sup>ふなされてもひらけぬ運<sup>うん</sup>は力なく、めさまし軍の討死は武士のかゞみとしらざるか。親の子ならば、なぜ親のまねはせぬ。(51)

といい、色遊びに溺れている正行に対して、いくら武勇に優れている立派な武士であっても色に迷っては欠点になると、天皇の勅命を請けてから湊川で討死するまで、身を嗜み女色に交わることがなかった父正成の忠義を見習うべきだと訓戒している。この場面では「泣男」杉本佐兵衛は嘆きながら粘り強く正行を諫め、結局正行も自分の行動を後悔して涙を流すことになる。

このように、『南北軍問答』においては、孝子正行が女色に溺れるというおかしみと、泣男杉本佐兵衛が登場する点が新しい構想と言えるが、実相院が息子正行の不埒な行動を戒めるという構図自体は、『太平記』において正成の死を聞き、自害しようとする正行を戒める正成の妻のイメージと大きく異ならない(52)。

## 六. おわりに

正成伝説は「桜井駅の訣別」や「湊川の戦い」という舞台を中心に、

楠一族の忠孝の物語を描いているが、近世期における理想的な家のモデルとしての正成伝説の形成には、戦場で亡くなった正成の代わりに息子を訓戒する良妻賢母としての「正成の妻」が欠かせない存在として浮上してくる。

『理尽鈔』においては武士相手の講釈のテキストという性質にも起因し、正成の妻の役割は重要視されなかったが、それは一時的なことで、仮名草子『本朝女鑑』においては『太平記』の「正成の妻」像をそのまま受け継いだ形で、息子を訓戒する「楠帯刀母」として描かれている。また、時代浄瑠璃においても『吉野都』では「大力女」という逞しい女性のイメージが付与されたり、『南北軍問答』では女色に溺れる正行や泣男などの新しい構想が見られるものの、『太平記』における良妻賢母としての「正成の妻」の性質に変わりはない。

このように、「正成の妻」のイメージは『太平記』から時代浄瑠璃に至るまでは、良妻賢母としての性質を保ちながら、その上に新たな趣向を取り入れていた。そして、それが『吉野都女楠』では「女楠」という詞に結び付くことになる。歌舞伎にも「女楠」という造形が受け継がれていくことから、今後、歌舞伎の「女楠物」における「正成の妻」のイメージについても考察する必要があると思われる。

## 注

(1) 若尾政希によると、『明君』＝楠正成というイメージが確立していて、室鳩巢作の『明君家訓』(原題『楠諸士教』、元禄五(一六九二)年序)の原題は『楠諸士教』であり、「昔より本朝にて、人の上に居てさるあまらし心得たる人は正成なりけんかし」と、家臣を教諭する最適任者として正成を認めていたという(若尾政希『太平記読み』の時代)平凡社選書、一九九九年六月)。

(2) 若尾政希氏によると、山鹿素行は『山鹿語類』(寛文五(一六六五)年成立、正編四十三卷)で、『理尽鈔』所収の正成が、大勢に難所

なしの方便は古の書典には見えないという義貞の質問に答えて、自分分は古の書典は知らず、実は義経から做ったとした逸話を引用しながら、「案ずるに、文を学ばんことは、是古を知て今の用に致さんが為也。古を知て古き物語を云ことを必とせんことは、彼訓詁記誦の学にして人の学と云に非ず。楠が心得尤賢しと云べき也」といい、学問は正成のように、古から学んだことを当代の現実に適用させることだという（前掲、若尾政希『太平記読み』の時代）。

(3) 多数の武士が素行門をたたき、平戸藩主松浦鎮信、弘前藩主津軽信政、土浦藩主土屋数直、烏山藩主板倉重矩、岩槻藩主戸田忠信、赤穂藩主浅野長友、肥前大村藩主大村純長ら諸大名も素行の教授を受けた。著作も多数にのぼり、そのうち、素行が門人に語った言葉を門人らが編集した『山鹿語類』は、素行の学問の全体像を比較的に平易に語ったものである（前掲、若尾政希『太平記読み』の時代）。

(4) これらの兵書は、『太平記』巻十六に湊川での戦いに向かう前に正成が、嫡子正行を河内へ帰す際に、庭訓を残したとすることに淵源を辿ることができ、『理尽鈔』巻十六で正行を河内から桜井に呼び寄せ、「国ヲ政ルノ道教十箇条、法礼ノ事自筆ニ書置給又巻物一卷」を箱に入れて渡したとすることを根拠にしている（今井正之助『恩地左近太郎聞書』と『理尽鈔』愛知教育大学日本文化研究室『日本文化論集』第六号、一九九八年三月）。

(5) たとえば、楠正行の話は藤井懶斎の『本朝孝子伝』（三巻、天和四（一六八四）年刊）・『仮名本朝孝子伝』（三巻、貞享四（一六八七）年刊）などに挙げられ、日本を代表する孝子の一人として顕彰されていた（勝又基編『本朝孝子伝』本文集成、明星大学、二〇一〇年、解説参照）。

(6) 古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』の「菊水」の項を参照すると、正徳三（一七一三）年江戸中村座『女楠天下太平記』では、初下りの初代芳沢あやめが楠女房菊水となり、不在の夫に替わり、新田義貞に偽りの恋慕をいいかけてその行いを諫め、玄宗皇帝の長物語と大根漬けのおかしみも披露した。延享二（一七四五）年市村座『婦楠靚粧鑑』では二代目あやめが菊水となり、大森彦七に下女奉公して大根漬けを見せ、夫の敵と彦七に斬りかかり、湊川軍物語を聞かせるなど、父の芸をほぼ踏襲した。また寛政六（一七九四）年江戸

河原崎座『松貞婦女楠』では四代目岩井半四郎が菊水を勤めた。『女楠』は、明治二十五（一八九二）年三月『太平記』をもとに福地桜痴が脚色し、東京歌舞伎座で九代目市川团十郎が新歌舞伎十八番のうちとして演じた。奥方の名は菊水ではなく柏の前となっている（古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』、白水社、二〇〇六年）。

(7) 後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記』第二巻、『日本古典文学大系』第三五巻、岩波書店、一九六一年。

(8) 正成が兵庫に向う途中、「桜井駅の訣別」には、刀を直接手渡す場面は描かれていない。菊水は楠家の家紋で、後の浄瑠璃・歌舞伎の演芸ジャンルにおいて、正成の妻の名前は菊水として設定される。

(9) 前掲、『太平記』。

(10) 亀田純一郎「太平記読について」『国語と国文学』第八巻十号、一九三一年十月。

(11) 『太平記評判秘伝理尽鈔』東京大学総合図書館蔵。

(12) 『理尽鈔』の「奥書」には「太平記之評判者、武略之要術、治国之道也」と、その目指している所を明らかにしている。

(13) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(14) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(15) これは直義の戦略が以前正成から聞いた戦術からヒントを得ているからで、『理尽鈔』巻十六「正成兵庫下向事」において、正成は湊川に向かうにあたって和田・恩地らに尊氏兄弟が正成の死後、楠家の一族を味方につけようとの策略について遺訓している。また『理尽鈔』巻二十三で「此ヲ真似給へ共、可似ナシ」と、直義が幕政を行うに際して、正成の政治を真似ようとしたが、実現できなかったという。

(16) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(17) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(18) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(19) 前掲、『太平記』。

(20) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(21) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(22) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。

(23) 『太平記』巻十一の「右京亮時治妻」に対しての評を省略。

- (24) 『太平記』巻十一「佐介貞俊妻」に関わるエピソードを「妻の志も道に叶へり」とや」と、簡略化して紹介している。
- (25) 『太平記』巻十の「亀寿丸乳母」、「太平記」巻十八「瓜生判官母」の場合は非難している。
- (26) 従来浅井了意の作中に数えられて来たが、北条秀雄氏は真偽未決で、青山忠一氏は巻九の伊勢の記述が浅井了意著の『伊勢物語抒海』の記述と共通することで、濱田啓介氏は『東海道名所記』や『北条九代記』との比較によって『本朝女鑑』の作者が『東海道名所記』や『北条九代記』の作者と同一人物である蓋然性が高いことから、浅井了意と判断している。
- (27) 中村幸彦「仮名草子の性格」『中村幸彦著述集』第四巻所収、中央公論社、一九八七年。
- (28) 白倉一由氏や青山忠一氏が女訓の書として『本朝女鑑』を説話と叙述と教訓という構造を中心に考察しているに對して、濱田啓介氏は小説様式の上から、出典と創作の観点から検討し、『本朝女鑑』の虚構性を立証している。氏によると、『本朝女鑑』の各章は、様々の技法を駆使して、原拠に加工変更を加えている。
- (29) 仮名草子の特徴は教訓啓蒙性にあるが、啓蒙教訓を主眼とする仮名草子の中でも、娯楽により多く比重がかかっている作品があった(前掲、中村幸彦「仮名草子の性格」)。
- (30) 濱田啓介「本朝女鑑の虚構」(上)、『国語国文』第五十五巻七号、一九八六年七月。
- (31) 『太平記』巻一の「右近藏人頼員妻」、巻四の「左衛門佐局」「勾当内侍」、巻十の「亀寿丸乳母」、巻十一の「菊池入道寂阿妻」「右京亮時治妻」「佐介貞俊妻」、「越中守護三妻」、巻十四の「結城親光妻」、巻十六の「楠帯刀母」、巻一八の「瓜生判官母」、巻三十三の「那波五郎母」「兵部少輔某妻」が取り上げられている。
- (32) 『本朝女鑑』巻六「節義下」には『太平記』所拠の章が並んでいるが、これらの諸章も改変部分の少ない、原典に忠実な諸章である(前掲、濱田啓介「本朝女鑑の虚構」(上))。
- (33) 青山忠一『本朝女鑑』近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従』仮名草子編第七巻、勉誠社、一九七二年。
- (34) 濱田啓介氏は『本朝女鑑』は、間違いなく刊行販売のための執筆

- である。時好に合わせ、書肆も喜んで迎え、営利を得たものと思われる。されば本書は、刊行のための虚構を含む作品である。すなわち、刊行を目的とした近世小説への前駆的過渡的作品である。その虚構部分は、倫理的でもあるが、むしろその知巧的な一面こそ注目すべき一面である。それは早くも欺きの文芸としての道を歩みそめ、戯作的傾向への萌芽をきざしている。」といい、戯作者としての了意の能力と、それによる虚構の創作が近世小説への前駆的なものであると意見を提示している(濱田啓介「本朝女鑑の虚構」(下)『国語国文』第五十五巻八号、一九八六年八月)。
- (35) 前掲、濱田啓介「本朝女鑑の虚構」(上)。
- (36) 前掲、『近世文学資料類従』。
- (37) 井上伸子「江戸の女方」『立教大学日本文学』第四十号、立教大学、一九七八年七月。
- (38) 鳥居フミ子「女鎌足」とその特色」『東京女子大学日本文学』六十一巻、一九八四年三月。
- (39) 前掲、鳥居フミ子「女鎌足」とその特色」。
- (40) 前掲、鳥居フミ子「女鎌足」とその特色」。
- (41) 『演劇百科大事典』(平凡社、一九六一年)の「女楠」の項目(一)には、「楠正成の妻を主人公にした脚本の通称で、古くは近松門左衛門作の「吉野都女楠」にその趣向がみえるが、通常は「女楠天下太平記」(正徳三年十一月江戸中村座初演。初世芳沢あやめの楠妻菊水)と、「婦楠親粧鑑」(延享二年十一月江戸市村座初演。二世芳沢あやめの楠妻菊水)の略称。」と定義している。
- (42) 近松門左衛門「吉野都女楠」近松全集刊行会『近松全集』第六巻、岩波書店、一九八七年。
- (43) 大力の持ち主で、暴れ馬の手綱を高下駄でちゃんと踏んでとめたり、悪人を投げ飛ばし、晒しの布を振って翻弄する(前掲、古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』)。
- (44) 前掲、近松門左衛門「吉野都女楠」。
- (45) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』。
- (46) 木谷蓬吟氏は「吉野都」を南朝を中心とした「尊皇思想の作興」を目的としたと評しているが(『近松の天皇劇』淡清堂、一九四七年十二月)、森山重雄氏は正当なる天皇劇というよりは、二つの勢力(南

朝と北朝)にはさまれた零落武士の犠牲に中心があり、その意味では逆転した天皇劇だったと評価している(『近松の天皇劇』三一書房、一九八一年一月)。

(47) 前掲、近松門左衛門『吉野都女楠』。

(48) 小笠原幹夫「近松と太平記読み」『作陽音楽大学・作陽短期大学研究紀要』第二十六巻一号、一九九三年五月。

(49) 近松門左衛門『大経師昔暦』近松全集刊行会編『近松全集』第九巻、岩波書店、一九八八年。

(50) 西沢一風『南北軍問答』西沢一風全集刊行会『西沢一風全集』第五巻、汲古書院、二〇〇五年。

(51) 前掲、西沢一風『南北軍問答』。

(52) 正成の妻が色遊びを戒めるといふ趣向は、これより十年程前の歌舞伎にもすでに存在し、正徳三(一七一三)年十一月江戸中村座の顔見世狂言として上演された「女楠天下太平記」では、夫の正成の指示に従って、勾当の内侍との恋に夢中になっている義貞を諷めるため、わざと不義の恋を仕かけている。

# The Transformation of the Image of Kusunoki Masashige's Wife in Early Modern Japan

LEE Chung-Ho

The Graduate School of Arts and Sciences  
Interdisciplinary Cultural Studies,  
Department of Comparative Literature and Culture,  
The University of Tokyo

As he appears in the *Taiheiki*, Kusunoki Masashige is a military official who had a combination of the three virtues of wisdom, benevolence, and valor, and he is broadly known as a medieval hero who gave his life for the Emperor. After the passing of the Edo era, the instructive aspect of Kusunoki Masashige came to be emphasized, and this was the primary reason for dissemination of his legend.

In the *Taiheiki*, the wife of Masashige persuades their son Masatsura, who is distraught over the death on the battlefield of his father, not to kill himself by reminding him of the meaning of the instruction which Masashige had left behind. With this episode as starting point, the wife of Masashige afterward became known to society as, in the Meiji-era phrase, “a good wife and wise mother.”

However, in the *Rijinshō*, a retelling of the *Taiheiki* tales that was popular in the first half of the Edo era, the text treating Masashige's legend consists mainly of war talk and military science. It omits the scene in which the wife of Masashige taught her son the dying injunctions of his father and instead inserts the episode about the confrontation between the enemy camp and the members of Masashige's household over the treatment of Masashige's severed head. This substitution for the extensive description of Masashige's wife in the *Taiheiki* is seen as an example of the relegation of the existence of females to secondary position when the main subject is war talk.

In contrast to the *Rijinshō*, the wife of Masashige appeared for the purpose of edification in the lesson books of the early Edo period addressed to women. In the instruction for women, *Honchō jōkan*, the episode about the wife of Masashige in the original text of the *Taiheiki* is quoted in simplified form to suit the nature of instruction for women, the major purpose of which was to teach the example of a mother reasoning with her son to correct his wrongs.

In the *jidai jōruri* genre, the image of the wife of Masashige is formed a little differently. In Chikamatsu Monzaemon's *Yoshino miyako onna Kusunoki*, the wife of Masashige appears as in previous versions as a good wife and wise mother who disciplines her son to succeed to the legacy of her deceased husband, but in addition she is described as a sturdily built woman with physical strength and a strong character. Here, unlike the typical woman who sacrifices herself for a man in the *jidai jōruri* genre, the image of a strong woman who overcomes the troubles of war is granted to the wife of Masashige.

In another example of this genre, *Nanboku ikusa mondō*, the authors, Nishizawa Ippū and Tanaka Senryū, added a new feature. In their account, the wife of Masashige preaches at the son for indulging in sex with women. The point at which she preaches at him for his wrongdoing is the same as in the *Taiheiki*. But in addition to the description of the son as a womanizer, there is another change: It is the servant Nakiotoko who delivers the admonition on behalf of the wife of Masashige. This can be said to be a new conception.

In short, although the wife of Masashige maintained the image of good wife and wise mother from the medieval *Taiheiki* through the early modern *jidai jōruri* genre, over time new elements were added to the image and accepted.

**Key words:** Kusunoki Masashige, wife of Masashige, *Taiheiki*, good wife and wise mother, *jidai jōruri*